

「夏のクールなペットケア」

梅雨真っ只中の日本列島にも、まもなく夏がやってきます。高温多湿な梅雨時から夏にかけて、食欲不振や睡眠不足など体調不良になりがちなのは、私たち人間だけでなく、ペットたちも同様です。特に高齢のペットにとっては負担の多い季節、時には深刻な健康不良を引き起こす場合もあります。こんな季節を快適にそして何よりも元気に過ごすために夏のペットケアに重要な3つのポイントをご紹介します。

1 つ目は十分な水分の摂取です。体温調節を必要とする夏は、ペットも十分な水分を必要としているため、清潔な水を常に飲めるように準備します。また、私たちも夏バテ気味のときに水分を多く含む食べ物を欲するように、ペットも食欲減退のときにはウェットタイプのフードが食べやすく、またウェットの活用によって食事による水分摂取も可能になります。普段ドライタイプのペットフードを常食している犬や猫たちであれば、一部をウェットフードに切り替えて与えるのもひとつです。

2 つ目は温度管理です。室内飼育の場合でも、日中は窓を開けるなど室温管理はもちろんですが、特にパグ、フレンチブルドッグ、シーズーなどの短頭種やシベリアン・ハスキー、シェットランド・シープドッグ、グレート・ピレニーズなど被毛の厚い犬種のように暑さにとっても弱い犬には、冷やしすぎない程度にエアコンで室温調整をしてあげた方がいいでしょう。屋外で飼育しているペットであれば、直射日光を避け、風通しのよい涼しい日陰が確保できる環境が必須です。また、犬や猫も日射病や熱中症になる可能性があります。呼吸が荒くなり、よろよろして、呼んでも反応が鈍いようなときには、その兆候かもしれません。応急処置として日陰など涼しい場所に移動させ、冷たすぎない濡れタオルで体を冷やしてあげます。自力で水を飲める状態であれば、常温の水を適量だけ与え、獣医師の診断を受けましょう。日射病や熱中症は、重症になるとぐったりして動かず、意識を失ったり、舌が青くなるなどの症状が発生し、進行するとショック状態に陥って死亡する場合もあるので十分気をつける必要があります。また、車で移動の際は、短時間であっても決して車中に置きざりにしないこと。車内の冷房や窓の開放をしても決して安心とはいえません。高温な車内で事故につながる可能性があるほか、好奇心旺盛なペットが逃げ出し、迷子になったり交通事故にあたりする危険性もあるからです。

そして3 つ目は紫外線ケア、私たち同様にペットにも求められています。被毛が薄い、あるいは被毛や皮膚の色素が薄い犬や猫ほど紫外線に弱く、特に鼻梁や耳の先をはじめとした頭部、被毛の薄いお腹の部分は影響を受けやすいものです。ひどい場合には日光性皮膚炎を起こし、皮膚の乾燥・発赤・肥厚・フケ・脱毛・潰瘍などの症状を招くこともあります。そして、過度に紫外線を浴びることは皮膚癌のリスクを高めることにもなってしまいます。また、真夏の日中のアスファルトは、ペットが足裏にやけどしてしまうほど熱くなっていますし、ペットとオーナーの紫外線ケアも考えるならば、散歩は日差しの強い時間を避け、早朝や夕方が最適といえそうです。クールなペットケアの準備万端で元気に夏をスタートさせましょう。

マース ジャパンは、製品や社会貢献活動を通して、人とペットが共に暮らす笑顔あふれる社会の実現を目指しています。このニュースレターは、マース ジャパンが人とペットの共生をテーマにした研究や支援活動を目的に 1997 年に設立したリサーチセンターである非営利団体コンパニオンアニマル リサーチ (CAIRC) とマース オーストラリアがサポートするコンパニオンアニマルに関わる活動を推進している PIAS と協力して発行しています。